

武内今日子著（明石書店、2025年）

## 非二元的な性を生きる 性的マイノリティのカテゴリー運用史

松浦 優\*

本書は「ジェンダー非順応な人びと」（16頁ほか）をめぐる諸カテゴリーがどのように運用されてきたか、特に非二元的な性のカテゴリー運用について、1990年代から2010年代までの言説資料と、29名に対するインタビューをもとに、詳細に記述・分析したモノグラフである。

具体的には、歴史的な記述として、1990年代の女装コミュニティや男性学における萌芽的な実践や、1990年代から2000年代においてGID概念の制度化と普及がもたらした影響、関西のコミュニティやインターネット上の実践、そして「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」概念の確立などが、時系列的に整理されている。また、そこにおける人々の実践が、概念分析的なカテゴリー論の枠組みをもとに分析されている。

何よりもまず、本書は性的マイノリティの歴史についての極めて重要な研究である。非二元的な性をめぐる当事者実践を、多様な資料を通して丹念に描き出している。また、資料編のリストからもわかるように、ミニコミ誌等の文書資料だけでなく、オンライン資料も豊富に収集・分析されている。後続の研究にとって、オンライン資料を含む歴史社会学の方法論の面でも参考になる。

同時に、カテゴリーや自己に関する社会学的研究としても優れた内容となっている。非二元的な性のカテゴリーがどのように運用され、それによって何が可能になったのか、という点を実証的に描き出している。社会学の事例研究に対しては、良くも悪くも「この研究は社会学にとってどのような意義があるのか」と問われるが、本書はこうした問いにも正攻法で打ち返している。その意味で、本書は社会学の論文の書き方を学ぼうえでも参考になる研究であり、とりわけ博論本の模範になりうる一冊と言えらるう。

加えて、本書で記述されている事例は、本書の

分析枠組み以外の仕方では捉える可能性にも開かれている。歴史や当事者の実践について、同時代の文脈を捨象せずに記述しているからこそ、カテゴリー分析の視座にかぎらない、多様な読解の可能性が潜在している。

特に評者にとって興味深かったのは、これまで非二元的な性を生きる人々がどのようにして「いない」ことにされてきたか、という記述が時代ごとに詳述されている点である。つまり本書では、非二元的な性を語る実践だけでなく、語ることができなくなる状況についても、資料にもとづいて具体的に提示されている。

分かりやすい排除言説としては、Xジェンダーを二元的なジェンダーからの「逃げ」や「コンプレックス」、漫画の中性的キャラクターへの「憧れ」とみなすウェブ言説が挙げられている（第7章）。しかし本書では、そうした典型的な排除言説だけでなく、性的マイノリティやフェミニズムの言説のなかで生じる抹消についても、目をそらさずに記述されている。

たとえば、1990年代の同性愛者たちの議論のなかで、レズビアンやゲイのアイデンティティ構築を中心化することによって、ジェンダー非順応が焦点化されなくなっていた（第4章）。また男性学の領域で蔦森樹が探求した「男女いづれでもない性の思想」は、同時代のフェミニストから「二元的なジェンダー観のもとで社会構造にいかなる政治的效果をもつかという点から理解されてしまう」ことになった（93-4頁）。あるいは、二元的なGID医療が焦点化されることによって、非二元的な性が不可視化されていった（第5章）。

バトラー的に言えば、ある枠組みや議題が設定されるとき、別様な仕方では発言や問題提起や思考をする可能性が「予め排除」される。本書ではこうした構成的排除の具体例が、当事者たちの概念

\* 東京大学特任研究員（日本学術振興会特任研究員PD）

実践とあわせて、随所に記録されている。こうした事例は、フェミニズム／クィア研究をしている人々にも反省を促す要素を含んでおり、既存の研究枠組みを批判的に再考する際にも重要な参照点となるだろう。

強いて難点を挙げるとすれば、全体を通して査読論文並みの堅実さが志向されているがゆえに、書籍だからこそできる「遊び」や「思い切り」に欠けていることかもしれない。おそらく手堅い構成にまとめ上げる過程で、少なからずアイデアや知見を削ったのではないかと思われるため、注や補論のような形で、そうしたアイデアや踏み込んだ主張を読みたいと感じた。

たとえば、少なからぬ読者が関心を持つであろう論点として、非二元的な性をめぐる実践が「ジェンダー秩序」論にどのような示唆をもたらすか、という問いが挙げられる。もちろん本書でも、あくまで実践に焦点を当てるとしたうえで、規範や制度のあり方を問う意義にも留意されている(23頁)。非二元的な性を生きる人々の立場から、ジェンダーに関する社会理論を再考することが、今後の課題のひとつと言えるだろう。

また、社会学というディシプリンでの堅実さを志向しているがゆえに、狭義の社会学に収まらない領域への示唆については抑制的になっている。たとえば本書ではクィア理論に関して、ジュディス・バトラーのアイデンティティ論や、カテゴリー語の歴史を忘却してはならないという藤高和輝の主張などは参照されているものの、あくまで

分析の方針を述べるうえでの言及にとどまっている。既存のクィア理論は日本の非二元的な性についてどこまで説明可能か、既存の理論に対してどのような批判が提起できるか、そもそも非二元的な性をめぐる理論研究はどのような方向性を目指すべきなのか。精緻な実証研究だからこそ、(ときに空中戦になりがちな)理論研究に対する説得的な介入につながる可能性があると思われる。

ないものねだりの論点提示となってしまったが、上記の「難点」は決して本書の不備ではなく、むしろ本書が切り開いた研究課題と言えるだろう。本書の築いた土台の上に、今後さまざまな研究が展開されることが望まれる。

最後に、学術的な書評からはやや脱線するが、本書の最大の「効能」について触れておきたい。それは、「資料を残せば誰かが後世に引き継いでくれる」という希望を持てることである。繰り返しになるが、本書では当事者たちがさまざまな媒体で残してきた言説資料を可能なかぎり参照しているほか、主流的な問題設定のもとで埋もれてきた言説を再評価することもなされている。このこと自体が、記録を残そうとする当事者にとって、あるいは理解されづらい問題に取り組む研究者にとって、大きな励みになるはずである。また、本書の「おわりに」でオーラルヒストリーのアーカイブづくりへの意欲が語られているが、アーカイブもまた同様の希望につながるものである。そうした研究や活動を、本書の著者が継続していくことを願ってやまない。